

開催の挨拶

井上 芳保

こんにちは。主催者の井上です。この社会臨床研究会は、いつも大学でやってきたんですが、今回は初めてみんたるさんを使わせていただきました。本日はこのようにたくさんの方が来て下さって嬉しく思っています。

この研究会を「社会臨床」というネーミングにしたのは、「心理臨床」の向こうをはってということがあります。「心のケア」の場合がそうですが、問題を個人のレベルだけで心理主義的に押さえるのではなくて、もっと人と人との関係性とか、社会の構造だとか、そういうところから考えて変えていかないと本当の解決に結びつかないことが多いんじゃないかと考えてのことです。そういうことを意識してこの研究会は続けてきました。

基本的にそういう問題関心から始めた研究会ですが、ここ数回は、医療の問題を中心に取り上げています。特に今回は精神医療に的を絞ってまして、京都からお招きしたお二人にお話をさせていただくことになっています。この場にお集まりの方は、いろいろなルートでこの研究会のことをお知りになったと思いますが、青いリーフレットをお持ちでしょうか。入り口にも貼ってありましたけれど、そこに5行ほど短い文章で書いておいたものがありますので読んでみます。

フランコ・バザーリアの改革以降イタリアでは精神病院は廃絶されました。長期にわたって患者を精神病院に閉じ込めておく日本

のやり方とは大違いです。イタリアに長期にわたって滞在してフィールドワークを重ねてこられた松嶋さんと、脳生理学の研究者であり、かつ現代医療のあり方について社会学的視点を導入して、批判的に検討してこられた美馬さんのお二人を囲んで多々お話を伺いたいと思います。問題を医療化していく力の正体と、それに抗する精神医療よりよい何か、ここが鮮明に見えてくるような内容が期待されます。

こんな短い文章を書いたのですが、この紹介の中身に惹かれて足を運ばれた方もいるかもしれません。紹介してありますように、松嶋健さんはイタリアでフィールドワークをして来られた人類学の研究者です。松嶋さんには実は昨日もさっぽろ自由学校「遊」という場で似たテーマのお話をしてもらいました。今日も後で登場すると思いますが、バザーリアの行った改革の魅力的な点についてたっぷり聴けるでしょう。

イタリアで精神病院を無くしたとはどのような事態なのか。私が理解したところでは、それは単に施設をなくしてしまったということではない。イメージとしてそういう部分だけが強調されがちだけれども、本当は違えます。「脱施設化」と「脱制度化」とは違うということです。その「脱制度化」とは何なのかについて、これからのお話で出てくるんじゃないかと思っています。

つまり、関係性の中で精神医療、精神病というものを捉えていく。そういうことを掘り

下げて検討していった結果として、精神病院というものはいらぬというロジカルな結論に至りついたということなんですね。その辺が何か精神病院をなくしたからそれでいいみたいなことで、そこだけで語られてしまうと重要な何かがちやうとという趣旨の話だったと私は受け止めています。詳しくは後でお話があると思います。

それからもう一人、美馬達哉さんは、本業は医師であり、脳生理学の研究者でもいらっしゃるって、最近も『脳のエシックス』という本が人文書院から出ています。ちょうど一週間前に朝日新聞の書評で本が紹介されていました。高村薫さんというミステリー作家が書評を書いていまして、そちらで名前をご存知の方もいらっしゃるかもしれません。脳の研究をされていますが、非常に問題関心の幅が広く、いろんな角度から物事を考えておられて、特に社会学的視点を使って医療という現象を捉え返していくという面白いアプローチを取っておられます。その点で私の関心と接点があります。『現代思想』2010年12月号が「医療現場への問い」という特集を組んでいますが、そこに「精神医療に代わるもの——フランコ・バザーリアと精神医療改革の思想」という論文をお書きになっています。

美馬さんには今日はイタリアの精神医療の話に入る前に、最初に日本の精神医療というのはこれまでどういうふうな状況に置かれてきて、今はどうなっているのかということをもまず話していただきます。さっきの文章でも長期にわたって病院に閉じ込めておくという日本のやり方、という一節が出てきました。イタリアと日本とは、近代の国民国家として成立して今日に至るまでの時間の経過は約150年で似たくらいですが、どうしてこんなふうに違ってきちゃったのか、という比較が

最初にできればと思っています。

今日の資料として皆さんのお手元にホチキスで止めたもの2点が配られています。一つは多賀茂・三脇康生編『医療環境を変える』（京都大学学術出版会、2008年）に収められている、松嶋さんがお書きになった「イタリアの例から：バザーリアと制度を使った精神療法——脱施設化から脱制度化へ」という論稿です。サブタイトルが「脱施設化から脱制度化へ」となっています。この内容が今日の松嶋さんのお話の一つの核になると思います。

もう一点は、美馬さんからぜひ配って欲しいと要望されてのものです。少し古い本からです。1974年の出版ですからもう30年以上も前ですが、小澤勲『反精神医学への道標』（めるくまー社）という本の一部です。この中で、薬の処方がどのような意味を持っているのか、なぜ薬を処方するのか、実はそれは精神科医のほうの不安を静めるためであるという面白い指摘がまずされています。患者側のためというよりは医療側の都合であるというのです。しかし、薬というものを全部否定するわけにも行かないだろうとも述べています。問題を起こした子供がいる場合に、あるいは暴れたりするということが発生したときに、どういうふうにならぬかを受け止め、考えていったらいいのかと掘り下げて検討している箇所があって、そこを特にコピーをしています。それに関わる内容のお話がたぶん後で美馬さんのほうから出てくるんじゃないかなと思っています。

ですから、最初に美馬さんに日本の精神医療の経緯、今日に至るまでの経緯についてアウトラインを説明していただき、次に松嶋さんから精神病院を廃絶したイタリアの精神医療に関わるお話をさせていただきます。それでは美馬さんよろしくお祈りします。